

イギリス——「フィランソロピーの帝国」の歴史

金澤 周作

はじめに

- 1 周辺の挿話としての扱い：福祉国家成立前史の研究
- 2 ジャンルとしての確立：ジョーダンとオーウェンの集大成
- 3 隣接分野との結びつきの形成：プロハスカとモリスの転回
- 4 イギリス史像のひとつの核へ：1990年頃からの活況
- 5 脱国民国家史観にたつ全体史へ：これからの論点
おわりに：歴史を踏まえた現在と未来

はじめに

おそらく、フィランソロピーの歴史研究でもっとも蓄積がある地域はイギリスであろう。このような状況をもたらした背景には、膨大な救貧法 (Poor Laws) 史研究に象徴される貧困や救済問題への強い関心と、連綿として培われてきた社会史の伝統がある。また、事実としてイギリスには明示的に濃密なチャリティの時空間が現在に至るまで存在し続けてきたことも関係しているだろう (NCVO, 2009; 公益法人協会, 2007)。本稿では、フィランソロピー史の長い研究史を、代表的な成果を紹介することで簡潔に概観しつつ、この魅力的な分野がどのような知見を生み出してきたのか、そしてどこへ向かうのか、すなわちこの先どのような研究の可能性を秘めているのかを論じてみたい。

基本的な用語について付言しておくが、イギリスにおいて「民間非営利の弱者救済活動」は、長らく「チャリティ」という語で表現されていたが、近世・近代を通じて、比較的宗教的色彩の薄い「フィランソロピー」という語も同義的に用いられた。ただし、「チャリティ」には、法的に規定される「慈善信託 (charitable trust, endowment)」という特定の意味もあり、しかも20世紀後半以降は、一見その活動内容が慈善的でなくても「公益」性のある自発的な団体はすべて国の機関である「チャリティ委員会」によって登録され、「チャリティ」と称されることになっていて、用語法が錯綜しており、注意が必要である。

1 周辺の挿話としての扱い：福祉国家成立前史の研究

そもそも、チャリティにせよフィランソロピーにせよ、それ自体が歴史学の研究テーマになるこ

とは20世紀に入るまでほとんどあり得ないことだった。しかし、20世紀初頭に国家による福祉の試みが台頭してくるに伴い、事情は変わってきた。冷酷な救貧法とそれに付随する前近代的で不合理なチャリティからなる20世紀以前のセーフティネットの仕組みは、20世紀半ばに全貌をあらわす手厚くて計画の行き届いた国家福祉を前に敗れ去るものと目された。いきおい、研究の主眼は福祉国家をゴールとする歴史の再構成ということになる。今から見ればあからさまなホイッグ史観（進歩主義的で目的論的な歴史像）に染まった研究のひとつとして、チャリティ史研究は産声をあげた。

たとえば、B.K.グレイ『修道院解散から第一回センサスまでのイングランドのフィランソロピーの歴史』（1905）は、18世紀で検討が終えられてしまうが、その後の内外のイギリス福祉国家史研究では長らく参照され、過去の遺物としてのチャリティというイメージを決定付けた（Gray, 1905）。半世紀以上たった後も、K.ウッドルフ『慈善から社会事業へ——イギリス及びアメリカ合衆国における社会福祉の沿革』（1962）に見えるような「慈善から社会事業へ」という図式は、大きな影響を持った（ウッドルフ, 1997）。この理解は我が国の社会事業史研究にも輸入され、高島進や高野史郎などの先駆的な福祉史研究者の構築した歴史像の骨格をなした（高島, 1979；高野, 1985）。

2 ジャンルとしての確立：ジョーダンとオーウェンの集大成

福祉国家（史）研究の前座のような位置づけを脱して、チャリティをそれ自体として検討対象とし、近接諸分野にも大きな影響を与え続けている二大研究は、1950年代末から1960年代前半にかけてあらわれた。W.K.ジョーダン『イングランドにおけるフィランソロピー 1480年～1660年』（1959）は中世末期から1660年までを扱い、この時期の遺言書などの史料を網羅的に駆使して、信託型（基金立）チャリティのイングランド全土における傾向を描き出した（Jordan, 1959）。他方、デイヴィッド・オーウェン『イングランドのフィランソロピー 1660年～1960年』（1964）は、ジョーダンが擧筆した1660年を起点として、1960年までのイングランドにおけるチャリティの多様な実像を、相対的に新しい形態である篤志協会型（募金立）チャリティの動向も含めて、幅広い範囲の多様で膨大な史料に立脚して、丹念に、網羅的に扱った（Owen, 1964）。近代以降のチャリティを研究する際には、オーウェンの著作は必ず出発点として参照される。

3 隣接分野との結びつきの形成：プロハスカとモリスの転回

ジョーダンとオーウェンの研究はいずれもきわめて包括的なものであり、それゆえにしばらくは新たな研究を誘発しなかった。また、E.P.トムスンやE.ホブズボームに代表される、マルクス主義の影響を被った下からの社会史の潮流は、声なき「ふつうの人々」の主体性を回復すべく、社会的抗議行動や独自のモラルなどに焦点をあわせた。1970年代のこのような高揚のなかで、富者による貧者の救済といったテーマは、社会統制の文脈を除けば、注目を集め得なかったと思われる。

しかし、社会史をチャリティと結び付ける新しい研究対象が浮上してきた。男性中心史観によって周辺に追いやられてきた「女性」である。近代化とともに比較的富裕な女性は家庭（私的領域）に閉じ込められた。政治や経済の世界（公的領域）で自己主張したり働いたりすることは許されな

かった。しかし、チャリティ活動は大きな例外であり、工業化した都市社会において富者と貧者を架橋する積極的な役割を与えられていた。いちやくこの点に注目したのは、女性史のパイオニアの一人、アン・サマーズの論考である（Summers, 1979）。しかし、もっとも重要な成果は、その後フィランソロピー研究の第一人者となるフランク・プロハスカの『19世紀イングランドにおける女性とフィランソロピー』（1980）であろう（Prochaska, 1980）。同書では、オーウェンがさほど関心を示さなかったバザーや貧者宅訪問など、知られざる女性によるチャリティ活動の全貌を多面的に再構成してみせて、後続の研究を活発化させる、最重要の古典となった。

ただ、チャリティ研究は女性史の領域にとどまっていた。先に述べた社会史のスタンスとあまりにそぐわないテーマであったことや、80年代のサッチャリズム（新自由主義）——福祉の切り下げ、自己責任の強調、ヴィクトリア時代の価値の再評価——に対して、歴史学界が総じて強く抵抗していたことが原因だろう。チャリティの歴史的な再評価は、政治的な保守の立場を補強しかねなかったのである。しかし、先述のプロハスカはこの時期にチャリティをイギリス社会史の中に植え付ける仕事を着実に進めた（代表的なものとしてProchaska, 1988）。また、R.J.モリスの「自発的結社」（ヴォランティア・アソシエーション）研究（Morris, 1983）は、チャリティだけでなく政治や文化の結社も考察対象にし、こういった官／公（オフィシャル）でも私（プライベート）でもない公共的（パブリック）な場における自発的人的結合が、都市社会において不可欠のインフラを提供し、ここに集った人びとは「ミドルクラス」として自己練成したと主張して、画期的であった。彼の研究はその後のものも含め、90年代以降に生み出される多くのチャリティ研究の導きの星となった。

4 イギリス史像のひとつの核へ：1990年頃からの活況

冷戦の終結、東西ドイツの統一、ソ連邦の解体、サッチャーの退陣といった内外の政治情勢の激変、そして社会史の第二ステージとしての文化史の台頭は、新自由主義への批判の道を模索していたとも言われる歴史研究に新たな風を吹き込んだ。つぎつぎに明らかにされた「ふつうの人」（労働者、貧者、犯罪者、病人、女性、外国人、マイノリティ）の独自の行動様式とその構築過程は、単純な個人主義からも、図式的なマルクス主義的な解釈枠組みからも、還元主義的な言語論的転回理解からも解き放たれ、あらためて、かれらの生きた世界の政治文化の中に置き戻され、複雑な権力関係、多様な共同性が明らかにされていった。

このような転換をチャリティ史の分野で象徴するのがM.ドントン編『イングランド史におけるチャリティ、利己、福祉』（1996）と、H.カニンガム & J.イニス編『チャリティ、フィランソロピー、改革 1690年代～1850年』（1998）という二つの論文集である（Daunton, 1996；Cunningham & Innes, 1998）。これらの論集でも顕著なこの時期の研究の焦点は、先述のモリスが強調した自発的結社型のさまざまなチャリティ活動であった。この型の病院や学校が、同時代のイデオロギーや思潮を反映し、いかに社会の統治や階層・階級の形成に寄与したか、あるいはいかに先述の「多様な共同性」を維持・構築していたかを、多くの事例研究が明らかにして、とくに都市社会史の領域を刷新した。

これらの論集では、その後チャリティ研究の焦点となる二つのテーマも強調された。ひとつは、国家福祉より個人の努力を強調したサッチャリズムから逆説的に気づかされることになったように

見えるテーマである。すなわち、どのような地域・時代においても、広義の「福祉」は自助と公的救済のみならず互助やチャリティなどの複数のオプションからなり、さらに家族や市場とも密接に結びついていた。かかる想定のもと、当該地域・時代に固有の「福祉の混合経済」が究明対象になった。もうひとつは、チャリティのノウハウが国民国家の枠を超えて学ばれ移植された点に注目する、草の根の国際関係史とでもいえる研究である。これは、ポスト国民国家と言われるようになった時代の影響を受けたものかもしれない。

こうしたイギリスでのあらたな研究の盛り上がりと並行して、90年代には我が国でもすぐれた成果が挙げられた（永島, 1995；長谷川, 1996；坂下, 1997）。19世紀については、都市のチャリティに関する包括的な著書もあらわれた。これらは自発的結社のみならず他の形態のチャリティにも相応の注意を払い、リヴァプール、マンチェスタ、ブリストルにおけるチャリティのインパクトを考察しており非常に重要である（Simey 1992；Gorsky, 1999；Shapely, 2000）。

他方で、18世紀の重商主義体制とフィランソロピーを結び付ける古典的な図式——国富増進のために人材育成型チャリティが利用される——に独創的な深みと広がりを与えた研究もあらわれた（Andrew, 1989；川北, 1990）。これらはチャリティというテーマをイギリスの外、すなわち帝国史や国際関係史に展開していく方向性を指し示した。

以上はほんの一例である。90年代以降、チャリティに関する学術論文の数は爆発的に増加している。文学の分野でさえもチャリティは注目を集めるようになった（日本語訳されたものとして、ブルムナー, 2003）。

この豊かで多様な研究蓄積に多くを負いつつ、18世紀半ばから19世紀後半までのチャリティを形態の観点から整序した上で、それがイギリス近代と有機的に絡み合うさまを「全体」として提示する研究（チャリティから何か別の「大きな物語」を傍証するのではなく、チャリティをイギリス近代史の主旋律にする方向性）もできるようになった（金澤, 2008）。

チャリティは、イギリス史上における、珍奇な、やがて消え去る小さなエピソードという位置から、特定のテーゼを証明するための新鮮な切り口という位置を経て、いまでは現在に至るイギリス史を理解する上でキーとなる遍在的な要素という位置へと、その意味合いを大きく変貌させてきている。そしてこの認識は、内外の学界に浸透してきた。

5 脱国民国家史観にたつ全体史へ：これからの論点

チャリティがイギリスに遍在する主要素であるという認識に立つならば、その研究は、これからも多くのテーマを追究してゆける潜在力を持ち合わせている。以下では豊かな成果がのぞめると考えられるテーマ群をヒントとなる研究とともに列挙してみたい。

(1) 救貧法・四ネイションズ・福祉の複合体

16世紀末から20世紀半ばまでイギリスの公的扶助の基盤をなしてきた救貧法は、つねに重要な研究テーマである。とはいえ銘記すべきは、1601年には有名なエリザベス救貧法と相前後してチャリティ（信託）の振興を企図したチャリタブル・ユース法が制定されていることから分かるように、

イギリス近世・近代の弱者救済の歴史は、公的救済と私的チャリティの両輪を備えたものであった事実である（松山, 2001）。それでは、救済の現場において公的救済とチャリティはどのような関係にあったのだろうか。時期的ないし地域的な相違はどうだったのか。

また、実は救済のシステムは、イングランド&ウェールズ、スコットランド、アイルランドで異なっていた。イングランド&ウェールズの救済法は、各人に被救済権を主張し得る「定住教区」を指定した定住法（Settlement Laws）とセットに運営されたが、この規定によれば、たとえばアイルランドからやってきた窮民をイングランドの救済行政は救わないことになる。実際には非常に多数いたアイルランド系貧民はどのように処遇されたのだろうか。このように、公的救済と四ネイションズの多様性を加味したチャリティ研究が求められる（アイルランドはLuddy, 1995；スコットランドはCheckland, 1980）。

公的救済とは別に、イギリスの広義の福祉を考える際には、自助と互助、さらには市場の領域にも注意を払わなければならない。こうした福祉の複合体の中でチャリティがどのような位置を占めるのか、実態に即して具体的に検討してゆけば実り多いだろう（複合的だと唱えるだけなら研究にはならない）（高田, 2001）。たとえば「5%フィランソロピー」という、チャリティへの寄付者が配当金を得るシステムは、従来からあった企業福祉や「福祉資本主義」といった論点を超え、市民社会と経済、チャリティと営利という未開拓の領域に迫ることのできる刺激的なトピックである（岡村, 2008）。これと関連して、イギリスでは非常に希薄なチャリティの思想史的研究も、本格的に行われるようになるとよい（近年の成果としてLloyd, 2009）。

(2) テーマ史

イギリス近代の教育と医療は、基本的に「チャリティ」の領分であった。いわゆる初等教育は公教育が導入された際も、ヴォランティア学校の全国的な分布を前提として構築された。グラマー・スクールのような中等教育を担う機関もまたチャリティであった（宮腰, 2000）。病院はそもそも救済施設であり、富者は利用しなかった。総合病院から専門医院（産科を含む）まで、多種多様の医療活動は税金・公金に拠らず運営されていた（商業化の論点も含めてWaddington, 2000）。

以上のテーマだけでなく、孤児院や障害者収容施設、更生施設、国際人道支援組織、労働者向けの住宅供給、そして19世紀末からは環境問題に取り組むチャリティなど、さまざまな対象が考えられる。組織の年次報告書や小冊子類が手に入れば、教育史、医療史、社会福祉史などに貢献し得る新しい知見が得られると思われる。

(3) 受け手・マイノリティ・ジェンダー

チャリティ研究の圧倒的多数は、与える側の研究にとどまっている。しかし、受け手の主体性を考慮に入れてこそ、複眼的で厚みのあるチャリティ研究になるはずだ。数少ない業績としてはP.マンドラー編『チャリティの利用——19世紀の巨大都市における救済を受ける貧民たち』（1990）があり（Mandler, 1990）、近年もA.ボーセイ & P.シェイプリ編『医療、チャリティ、互助——イギリスにおける健康と福祉の消費、c. 1550年～1950年』（2007）が出た（Borsay & Shapely, 2007）。史料の制約は厳しいが、非常に面白い研究領域である。今後は、救済法史でも注目されている受け手の実

態解明のためにいっそうの研究が望まれる。

イギリスにいた黒人、ユダヤ人、外国人は、困窮した際、どのように救われたのか、救われなかったのか。たとえばユダヤ人についてはM.ロジン『富者と貧者——19世紀ロンドンにおけるユダヤ人フィランソロピーと社会統制』(1999)という出発点になる研究はあるが(Rozin, 1999), こうしたマイノリティとチャリティの関係には不明な点が多い。

プロハスカ以来、女性あるいはジェンダーとチャリティというテーマは多角的に論じられてきている。労働運動や参政権獲得運動といった近接する重要テーマとからめて追究する余地は大きい(河村・今井, 2006)。史料の残っている個人や団体からアプローチしてゆけば、新たな知見に至るのではないだろうか。たとえば、女性史では有名な「ガヴァネス慈恵協会」(1841年～)は、女性による女性のための団体であるが、一方では救済対象の選定にあたって(選挙権のある男性のように)国政選挙を模した選挙戦を行った。これはジェンダーの観点からどのように読み解かれるのだろうか。

(4) 環大西洋・帝国・世界

先に挙げたカニンガム&イニス編の論集(1998)に含まれるいくつかの論文が開拓した環大西洋的なチャリティ実践・ノウハウの往還のさまは、21世紀に入り、グローバリゼーションが一層実感されるようになるに伴い、ひとつの研究の核になった。たとえばトマス・アダム編『フィランソロピー、パトロネジ、市民社会——ドイツ、イギリス、北米の経験から』(2004)では、国民国家の枠を超えたチャリティ実践者たちの人的ネットワークと知的な交流の実態を浮かび上がらせている(Adam, 2004)。こうした研究の流れは、新たな国際比較にもなりうる。非英語圏の研究成果とも積極的に対話していく必要もあるだろう。

他方、帝国各地域のチャリティについては、徐々にその実情が明らかにされつつあるが(水谷, 2009), 未開拓領域は広大である。非公式帝国やその他の世界におけるチャリティについても、事情はあまりかわらない。ただし、たとえばS.シャーマ『飢饉、フィランソロピー、植民地国家——19世紀初頭の北インド』(2001)は、飢饉対策をめぐる植民地国家とイギリス系の民間によるチャリティと、そして土着のフィランソロピーがせめぎあう姿を具体的に描いていて面白く(Sharma, 2001), 「帝国の慈善(benevolence)」の過去・現在を論じたH.ギルバート & C.ティフィン編『重荷か恩恵か?——帝国の慈善とその遺産』(2008)も、おさえておきたい成果である(Gilbert & Tiffin, 2008)。

(5) 中世・近世・現代

ここ30年のチャリティ研究は、18, 19世紀に偏してきたように思われる。キリスト教世界であった中世におけるチャリティ、宗教改革の時代であり、また俗権が主権を主張するようになった近世のチャリティ、そして国家福祉の台頭で特徴づけられる世紀転換期から20世紀にかけてのチャリティ(チャリティ組織化協会にばかり注目が集まってしまうのは問題)についても、各時期の「福祉の複合体」、政策、法体系、経済システムなどを念頭に置きつつ、またこの30年間に工夫されてきた切り口を活かしつつ、再検討してゆくとよい(近世はBen-Amos, 2008, 20世紀はBradley, 2009を参照)。とくに現代のチャリティを歴史の文脈に置き直して再考し、現代チャリティと歴史的チャリ

ティの双方に有益な視野が開かれることが望まれる（近藤, 2007）。

また、この長い期間にわたり、宗教や信仰が果たした役割についても、検討がなされたらと思う。チャリティとキリスト教、あるいはイギリスのチャリティとプロテスタントイズム（あるいはエヴァンジェリカルイズム福音主義）を結びつけるのはよいとして、その結びつきの強度や特性、非常に細かく分かれた諸宗派間の違いと共通性、ミッション団体の動向など、繊細なまなざしを注ぐ必要があるだろう。そしてなにより、キリスト教信仰がイギリス社会の規範たりえなくなった現代において、なおチャリティが盛んな理由について、多面的に考えなくてはならない（Prochaska, 2006を批判的に読むことから始めたらよからう）。

おわりに：歴史を踏まえた現在と未来

以上、代表的な研究成果に即してイギリスにおけるチャリティ研究のこれまでとこれからを概観した。読者の多くは「これから」の方に注目すると思うが、筆者としては、これまでの諸成果をおろそかにしてほしくないという気持ちが強い。とりわけ、オーウェンやプロハスカの成果は決して「乗り越え」られ、捨て去られたりなどされないだけの情報を蔵している。適宜、振り返り、確認してくれたらと願う。また、本稿では個別の研究テーマを提案しているが、個別実証に耽溺するとしても、チャリティに染め抜かれたとあってよい歴史的イギリスの全体的な像をつねに意識してほしい。

本稿では個々の研究とそれがなされた時代背景を結び付けて叙述してきた。本稿の理解を補足するために、福祉国家史を中心としてイギリス史学史の展開をサッチャリズムとのかかわりで整理した長谷川貴彦の論文を併せ読むことをお勧めしておきたい（長谷川, 2008）。とはいえ、歴史家が実際にその時代状況を明確に意識して研究に反映させていたかどうかは必ずしもはっきりしない。多くの場合、結果的に時代性を刻印されたのだろう。それゆえ、これからチャリティ史研究に取り組む場合も、これまでの諸研究の問題意識や現代の状況に過剰に自己同一化して追従することなく（そんなことをすれば、研究をまとめる頃には「時代遅れ」になるか、いつまでも最先端の研究動向の消化・紹介に労力を割くだけになることが目に見えている）、新旧の諸研究から学びつつも、素朴な好奇心・探究心に立脚した独自の課題を見極め、粘り強く調査を進めていくのがよいだろう。おそらく、そのようにしてなされた研究のみが、後から振り返って時代性を認められるだろう。

チャリティ研究は、イギリスでも日本でも、ますます増加していこう。さらなる研究は、豊富な研究史との批判的対話から内在的に誘発されるものであるが、さまざまな危機が「福祉」をとりまいている現在という時代が要請している部分もある。簡便な処方箋は提供できないしすべきでもないが、じっくり腰を据えて導き出されるイギリスのチャリティに関する歴史学的な知見は、チャリティ的な営為に対してやはり関心が薄く（寄付文化が根付かない）、理解が乏しい（国家福祉に比して効果のない偽善とみなしがち）と言わざるを得ない日本に生きる人々に、チャリティが遍在するイギリス世界の歴史的由来をさまざまな角度から示すことによって、あるべき福祉のありかたについて、ほかの仕方では得られない種類の気づきと、現在と未来への示唆を得させてくれるものと信じている。

（かなざわ・しゅうさく 京都大学大学院文学研究科准教授）

【文献リスト】

- Adam, T. (ed.) (2004), *Philanthropy, patronage, and civil society: Experiences from Germany, Great Britain, and North America*. Bloomington.
- Andrew, D. T. (1989), *Philanthropy and police: London charity in the eighteenth century*. Princeton.
- Ben-Amos, I. K. (2008), *The culture of giving: informal support and gift-exchange in early modern England*. Cambridge.
- Borsay, A. & Shapely, P. (eds.) (2007), *Medicine, charity and mutual aid: The consumption of health and welfare in Britain, c. 1550-1950*. Aldershot.
- Bradley, K. (2009), *Poverty, philanthropy and the state: Charities and the working classes in London, 1918-79*. Manchester.
- Checkland, O. (1980), *Philanthropy in Victorian Scotland: Social welfare and the voluntary principle*. Edinburgh.
- Cunningham, H. & Innes, J. (eds.) (1998), *Charity, philanthropy and reform: From the 1690s to 1850*. London.
- Daunton, M. (ed.) (1996), *Charity, self-interest and welfare in the English past*. London.
- Gilbert, H. & Tiffin, C. (eds.) (2008), *Burden or benefit?: Imperial benevolence and its legacies*. Bloomington & Indianapolis.
- Gorsky, M. (1999), *Patterns of philanthropy: Charity and society in nineteenth-century Bristol*. Woodbridge.
- Gray, B. K. (1905), *A history of English philanthropy: From the dissolution of the monasteries to the taking of the first census*. London.
- Jordan, W. K. (1959), *Philanthropy in England 1480-1660: A study of the changing pattern of English social aspirations*. London.
- Lloyd, Sarah (2009), *Charity and poverty in England, c.1680-1820: Wild and visionary schemes*. Manchester.
- Luddy, M. (1995), *Women and philanthropy in nineteenth-century Ireland*. Cambridge.
- Mandler, P. (ed.) (1990), *The uses of charity: The poor on relief in nineteenth-century metropolis*. Philadelphia.
- Morris, R. J. (1983), 'Voluntary societies and British urban elites, 1780-1850: an analysis', *Historical Journal*, 26.
- NCVO (2009), *The UK civil society almanac 2009*. London.
- Owen, D. (1964), *English philanthropy, 1660-1960*. Massachusetts.
- Prochaska, F. (1980), *Women and philanthropy in 19th century England*. Oxford.
- Prochaska, F. (1988), *The voluntary impulse: Philanthropy in modern Britain*. London.
- Prochaska, F. (2006), *Christianity & social service in modern Britain: The disinherited spirit*. Oxford.
- Rozin, M. (1999), *The rich and the poor: Jewish philanthropy and social control in nineteenth-century London*. Brighton.
- Shapely, P. (2000), *Charity and power in Victorian Manchester*. Manchester.
- Sharma, S. (2001), *Famine, philanthropy and the colonial state: North India in the early nineteenth century*. Oxford.
- Simey, M. (1992, reprint of 1951 edition), *Charity rediscovered: A study of philanthropic effort in nine-*

teenth-century Liverpool. Liverpool.

- Summers, A. (1979), 'A home from home: Women's philanthropic work in the nineteenth century', in *Fit work for women*, ed. Sandra Burman. London.
- Waddington, K. (2000), *Charity and the London hospitals 1850-1898*. London.
- キャスリーン・ウッドルーフ (1997) 『慈善から社会事業へ—イギリス及びアメリカ合衆国における社会福祉の沿革』(三上孝基訳, 中部日本教育文化会; 原著 Woodroffe, K. (1962), *From charity to social work in England and the United States*. London.)
- 岡村東洋光 (2008) 「5パーセントフィランソロピー活動の意義と限界——ウォーターロウと工業階級住宅改良首都協会を中心に」『英国におけるフィランソロピーの思想と運動の実証的研究——19～20世紀を中心に』(科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究成果報告書, 研究代表者 岡村東洋光).
- 金澤周作 (2008) 『チャリティとイギリス近代』京都大学学術出版会.
- 川北稔 (1990) 『民衆の大英帝国——近世イギリス社会とアメリカ移民』岩波書店.
- 河村貞枝・今井けい編 (2006) 『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店.
- 近藤和彦 (2007) 「チャリティとは慈善か——公益団体のイギリス史」『年報 都市史研究』15.
- 公益法人協会 (2007) 『英国におけるチャリティ制度に関する調査研究 報告書』.
- 坂下史 (1997) 「名誉革命体制下の地方エリート——ブリストルにおけるモラル・リフォーム運動から」『史学雑誌』106-12.
- 高島進 (1979) 『イギリス社会福祉発達史』ミネルヴァ書房.
- 高田実 (2001) 『「福祉国家」の歴史から『福祉の複合体』史へ——個と共同性の関係史を目指して』社会政策学会編 『「福祉国家」の射程』ミネルヴァ書房.
- 高野史郎 (1985) 『イギリス近代社会事業の形成過程——ロンドン慈善組織協会の活動を中心として』勁草書房.
- 永島剛 (1995) 「ヴィクトリア時代ロンドンの篤志病院——セント・ジョージ病院を中心として」『三田学会雑誌』88-3.
- 長谷川貴彦 (1996) 「イギリス産業革命期における都市ミドルクラスの形成——バーミンガム総合病院 1765-1800年」『史学雑誌』105-10.
- 長谷川貴彦 (2008) 「ポスト・サッチャリズムの歴史学——歴史認識論争と近代イギリス像の変容」『歴史学研究』846.
- ロバート・H. プレムナー (2003) 『社会福祉の歴史——文学を通して見た他者援助』(西尾祐吾・栗栖照雄・得津愼子・牧田満知子訳, 相川書房; 原著 Robert H. Bremner (1996), *Giving: Charity and philanthropy in history*. New Brunswick.)
- 松山毅 (2001) 「イギリス近代初期の慈善活動の成立過程に関する一考察——Statute of Charitable Uses. (1601) を中心に」『日本福祉教育専門学校紀要』9-1.
- 水谷智 (2009) 「イギリス帝国の人種秩序と植民地インドの白人系「孤児」——ジョン・グラハムの教育事業」『西洋史学』236.
- 宮腰英一 (2000) 『19世紀英国の基金立文法学校——チャリティの伝統と変容』創文社.